

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6 月 6 日現在

機関番号：14401

研究種目：新学術領域研究

研究期間：2008～2012

課題番号：20101006

研究課題名（和文） 国家の輪郭と越境

研究課題名（英文） Beyond the Contours of State

研究代表者

山根 聡 (YAMANE SO)

大阪大学・言語文化研究科・教授

研究者番号：80283836

研究成果の概要（和文）：

本研究課題では、地域大国の比較研究を中心軸に捉えつつ、異なるディシプリンながらも、地域大国の周縁的存在を研究する点で一致する研究者によって、地域大国のマイノリティとしてのムスリム、移住者、特定の一族など、周縁に置かれるがゆえに中心(大国)を意識する事例を取り上げた。この中で国際シンポジウム主催を1回、共催を2回行った。また国際会議を3回、研究会を25回以上開催し、この期間内に発表した論文も60点を超えた。2013年度には成果を公刊する予定であり、異なる地域を研究対象とする研究者の交流が、研究分野での未開拓分野を明らかにし、今後の研究の深化に大きく貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：

This inter-disciplinary project focused on the ‘marginal actors’ for regional powers such as Muslims in the regional powers, immigrants, particular families, or marginal countries such as Armenia, Iran, Pakistan, Sweden, and so on, by the researchers of different disciplines. This project tried to make it clear that how the minority in the regional powers has a sense of their own connection to the states, especially focusing the individuals in the regional powers. In this study duration, we hosted one big international symposium as well as 2 co-hosted international symposiums, 3 international meetings and 25 meetings and more. Besides, we published 60 articles regarding this research and in 2013 we are planning to publish a book on this theme. Thus, we could push out the frontier of the regional study by this collaborative project and we are sure that we could bring out a pretty good contribution in the field of inter-disciplinary study.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2009年度	12,600,000	3,780,000	16,380,000
2010年度	15,000,000	4,500,000	19,500,000
2011年度	15,900,000	4,770,000	20,670,000
2012年度	12,100,000	3,630,000	15,730,000
総計	60,800,000	18,240,000	79,040,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：地域大国、国家、マイノリティ、移民、越境、国際研究者交流、多国籍

## 1. 研究開始当初の背景

現在のユーラシア大陸では、ロシア、インド、中国という地域大国が、周辺国・地域に何らかの形で支えられると同時に、地域大国内部が、周辺国・地域の変動に呼応して、多元化する状況が観察される。地域大国が各地域に占めた政治的・文化的ヘゲモニーは、有形無形を問わず、周辺国・地域に通時的影響を刻み、国家の輪郭を超えて一定範囲の政治圏・文化圏を構成している。

研究代表者は、科学研究費プロジェクトで南アジア系ムスリム移民のネットワークを、ウルドゥー語メディアを通して研究し、2度の国際シンポジウム開催を踏まえてこれを成果として公開した。他方、スラブ研究センターが過去5年間に展開してきた21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化」は、ポスト・共産圏において歴史的にも関係の深い周辺地域との交渉を活性化させることで、新たな個性を獲得するに至った空間（中域圏）の出現を理解する試みであった。

本研究プロジェクトの課題は、ロシア、インド、中国という地域大国とその周辺諸国・地域が織り成す相互依存・相互浸透のダイナミズムを、各研究者が対象地域以外の地域に乗り込むことで、地域大国間の相互関係を深く理解することを目指す。

## 2. 研究の目的

(1) 何をどこまで明らかにしようとするのか

①ナショナルなものとの宗教的なもの：本研究は、ナショナルなものとの宗教的なものとの相関について、少なくとも過去100年の動態を分析対象とし、両者の位相に変化をもたらす政治的・社会的要因を解明する。

②ディアスポラとネットワーク：従来、ディアスポラやネットワークという概念は、国家の輪郭を相対化し、人々が主体的に別個の共同体を作り出そうとする運動を捉えるのに有効だと考えられてきた。しかし本研究は、国民国家を越境しながらもなお、国家の引力から離れられない人間の運動にも留意し、移動における分散と再還元の流れを明らかにしたい。

(2) 領域内での研究の有機的な結合により、新たな研究の創造が期待できる点

①ナショナルなものとの宗教的なもの：「帝国の崩壊・再編と世界システム」班と協力し、帝国の統治構造、その崩壊、国民国家としての再編制という過程を通じて、宗教とナションの相互関係がどのように変容してきたのかをより動的に捉えることができる。

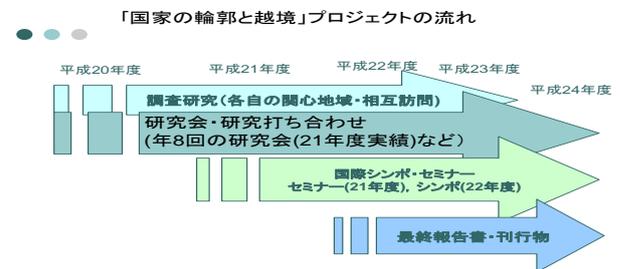
②ディアスポラとネットワーク：ここでは、国際秩序を扱う研究班と協力することによ

って、地域大国の内政と外交との結びつきをより立体的に理解できる。さらに、地域大国の文化的影響力を扱う研究班と連携し、分析概念としてのディアスポラの用語をより理論的に醸直することが可能となる。

(3) 学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義：本研究の特色は、地域大国の周縁的存在に関する研究者で構成され、歴史的視点を持ちつつ、人類学、社会学、政治学の手法の統合を試みる点である。これは、地域の個別性に拘泥し、理論研究と対抗関係にあるような地域研究の現状を克服できるものと確信する。また、本研究は、人間の視点に依拠する新たな国際関係論を生み出すことで、人間の安全保障に理論的・実践的な貢献ができる。

## 3. 研究の方法

本研究班は、周縁が地域大国を支え、地域大国内部でも中域圏が現れるという世界秩序を踏まえた研究協力体制をとっている。本班は、地域大国の周縁やその内部のマイノリティを専門とする研究者を結集しているが、それは偶然ではない。なぜなら、マイノリティにおいてこそ、地域大国が国民国家として振舞う際に生じる軋みが最も顕著に現れ、国民国家の構造を分析する最良の視座が得られるからである。



## 4. 研究成果

本プロジェクトは、地域大国がそれぞれ多民族、多文化、多宗教を抱えるばかりでなく、世界中に多くの移民社会を抱えつつ、それら移民社会と常にネットワークを広げている点から、特に地域大国の周縁的存在の研究に焦点を据え、地域大国のマイノリティとしてのムスリム(回族)、移住者、特定一族、あるいは地域大国の影響を受ける周辺国など、周縁に置かれるがゆえに、中心(地域大国)を強く意識する事例を取り上げてきた、それは中国、ロシア、インドのムスリムが、相互的に、あるいはそれ以外のムスリムとネットワークを構築するなかで、自らを地域大国の一員であると宗教的に正当化する作業を比較

検討したものや、ロシアのムスリムが、マッカ巡礼という宗教行為の中に、大国(帝国)の論理をいかに内面化したか、という問題を扱ったもの、あるいは中国において多民族共生と民族自治の共存を志向する回族の実態や、在外カザフ人が帰還することで表面化する社会統合の問題、またスウェーデン人による旅行記に描かれたロシア像や、在外インド系作家が描出する祖国インド像に見られる理想的社会像の考察、さらには中国での感染症の発生をめぐる言説から見た大国への視線の分析、ユーラシアにおけるオスマン帝国やサファヴィー朝における少数派一族が帝国内での地位を確立する事例、ロシア帝国とオスマン帝国双方の臣民として生きてきたアルメニア人による民族主義運動の発生過程など、多様な問題を扱いながら、地域大国を周縁的存在から問い直し、その実像を検証するものとなった。

研究期間中には国際シンポジウム主催を1回、また他の研究プロジェクトとの共催での国際シンポジウムを2回行った。さらに、国際会議を3回、研究会を25回以上開催し、この期間内に研究分担者が発表した論文や著書も60点を超えた。その中には世界的な学術誌に掲載されたものも少なくなく、本研究が着実に成果を挙げていたことを客観的に示す事実であるといえよう。

この比較研究を異なる地域研究者、異なるディシプリンの研究者が意見交換のなかで進めることによって、比較する上でのいくつかの研究対象について、それぞれの地域によって研究の蓄積に濃淡が出てきたことは、大きな発見であった。インド・ムスリムによる巡礼の実態調査や、在英中国系移民やロシア系移民のアイデンティティに関する研究など、地域研究における未開拓分野を明らかにできたのは、異なる地域研究者の共同研究によってこそ明らかにすることができたのであり、わが国のみならず、学界全体にとって、今後の共同研究における課題を提示できることとなったといえる。その意味で、比較研究の可能性をさらに広げることができたことは、本研究課題の自負すべき貢献であったといえる。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計63件)

- ① 山根聡、対テロ戦争によるパキスタンにおける社会変容、現代インド研究第2号(2012)、査読有、35-57
- ② 長縄宣博、'The Hajj Making Geopolitics, Empire, and Local Politics: A View from the Volga-Ural Region at the

Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries The Hajj Making Geopolitics, Empire, and Local Politics: A View from the Volga-Ural Region at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries', "Alexandre Papas, Thomas Welsford, and Thierry Zarcone, eds., Central Asian Pilgrims: Hajj Routes and Pious Visits between Central Asia and the Hijaz (Berlin: Klaus Schwarz Verlag)", 査読なし(2012)、168-198

- ③ 長縄宣博、Holidays in Kazan: The Public Sphere and the Politics of Religious Authority among Tatars in 1914', Slavic Review 71、査読有、(2012)、25-48
- ④ 王柯、『民族的』『民族的』戦略の限界と公共性——ある中国沿海部ムスリム社会の『改革開放』、近代、第106号、査読有、(2012)、1-27
- ⑤ 王柯、中国南部ムスリム社会における「宗族」の成立と「漢化」—「陳埭回族」の事例を通じて、中国現代史研究会『現代中国研究』、査読有、30号、(2012)、1-27、
- ⑥ Akihiko Yamaguchi、Shah Tahmasp's Kurdish Policy, Studia Iranica、査読有、41(2012)、101-132
- ⑦ So Yamane、Laa Musaaviyast se Janam lene waalii Aawaazen: Unniisviin Sadii ke Aaghaaz men "Urdu Rasm al-Khat" kaa Tahqiqii Jaa'iza、Tahqiq、査読有、Vol.19-2、(2011)、1-48
- ⑧ 山口昭彦、サファヴィー朝(1501-1722)とクルド系諸部族：宮廷と土着エリートの相関関係、歴史学研究、885、(2011)、査読有、157-166
- ⑨ シンジルト、牧畜民にとってのよいこと—セテル実践にみる新疆イリ=モンゴル地域の自然認識の動態—、中国21、34、(2011)、査読有、135-162
- ⑩ Takayuki Yoshimura、"Fatherland" and Co-ethnics: The Relationship between Nationalism and Diaspora in the Armenian Modern Era, Black Sea Region in International Relations Old Issues, New Trends、査読なし(2011)、11-16
- ⑪ 山根聡、パキスタンとアフガニスタンの火種：連邦直轄部族地域について、中東研究、506号、(2010)、査読なし、11-18
- ⑫ 山根聡、対岸の火事から延焼へ、海外事情、58号、(2010)、査読なし、50-65
- ⑬ 山根聡、対ソ連戦争直前のアフガニスタンにおけるイスラーム運動、研究シンポジウム30年の後：イラン革命、アフガニスタン侵攻、中東和平 世界を揺るがし

- た 1979 年の中東と世界を振り返る、(2010)、査読なし、95-102
- ⑭ 山口昭彦、離散と越境のクルド人、中東・北アフリカのディアスポラ、(2010)、査読なし、52-57
- ⑮ 大石高志、ムスリムにおけるアイデンティティの複合性とその物象化：マッチ・ラベルからの検証、南アジア研究、査読有、22、(2010)、327-342
- ⑯ 大石高志、近現代南アジアのイスラーム：デーオバンド派を焦点にして、研究シンポジウム 30 年の後：イラン革命、アフガニスタン侵攻、中東和平 世界を揺るがした 1979 年の中東と世界を振り返る、(2010)、査読なし、116-121、211-218
- ⑰ 岡奈津子、「同胞の「帰還」——カザフスタンにおける在外カザフ人呼び寄せ政策、アジア経済、査読有、51 巻 6 号、(2010)、2-23
- ⑱ So Yamane、Sounds of Difference: A Study on Urdu Orthography in the Beginning of the Nineteenth Century、International Journal of South Asian Studies、査読有、2、(2009)、59-85
- ⑲ 王柯、日中戦争与“回教工作”、歴史研究、査読有、第 9 期、(2009)、87-105
- ⑳ 王柯、戦争に収斂された「回教徒」への思い：幻の対中「回教工作」(下)、環、冬号、(2009)、査読なし、261-275
- ㉑ Takashi Oishi、Aspects of Labour Intensive Economy around Bicycles in Modern India with Special Focus on the Import from Japan、京都大学 G-COE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」ワーキングペーパー、(2009)、査読なし、1-24
- ㉒ 長縄宣博、帝政ロシア末期のワクフ：ヴォルガ・ウラル地域と西シベリアを中心に、イスラム世界、査読有、73 号、(2009)、1-27
- ㉓ 吉村貴之、パリ講和会議とアルメニア問題、現代史研究、査読有、54 号、(2008)、35-51
- [学会発表] (計 65 件)
- ① So YAMANE、Think Umma, Use thre Modern-Networks of Modern Muslim Intellectuals in South Asia, 1900-1930, Central Asia Studies and Inter-Asia Research Sphere, March3, 2013, 東洋文庫
- ② So YAMANE、Dual Trend of Urdu and Punjabi Prosody、International Seminar of Pakistani Studies in Japan、2013 年 2 月 22 日、Lahore University of Management Science、(パキスタン・イスラマバード)
- ③ Hisae Komatsu、Too Asian, Not Asian Enough: Contemporary British Indian Writing from Hanif Kureish to the present、Bharatasamay International Conference “Indian Writing in English Writing” organized by Department of English, Faculty of Arts, Chulalongkorn University, Indian Studies Centre of Chulalongkorn University, Chula Global Network, Embassy of India, November 23, 2012、チュラロンコン大学 (タイ)
- ④ 長縄宣博、Drawing Russia as a Muslim Power? The Hajj from Tatarstan and Daghestan in the Post-Soviet Era、The 2012 Summer International Symposium of the Slavic Research Center, “From Empire to Regional Power, Between State and Non-state”、2012 年 7 月 5 日、北海道大学スラブ研究センター
- ⑤ Akihiko Yamaguchi、Iran’s Kurds (Akrād-e Irān) in Sharaf-nāme: Safavid Integration Policy and Forced Relocation of Kurdish Tribes to Khorasan、Konferentsii po kurdovedeniju Treti <Lazarevskie chtenija> (「クルド研究会議：第 3 回ラザレフ記念連続講演会」、May 14, 2012、Institute of Oriental Studies, Moscow、(ロシア)
- ⑥ Hisae Komatsu、Gandian or Babylonian?: A Study of Marwari Images in 1920s-30s North India、26th British Association for South Asian Studies Annual Conference “The Future of South Asia” April 13, 2012、the School of Oriental and African Studies, University of London (英国)
- ⑦ Natsuko Oka、'Kazakhstan’s Migration Policy toward Ethnic Kazakhs Abroad: New Circumstances, New Priorities'、The Third International Academic Conference of Institute of Central Asian Studies, Hankuk University of Foreign Studies, (Global Campus (Yongin city), March 30, 2012、Hankuk University of Foreign Studies (韓国)
- ⑧ Norihiro Naganawa、Russia’s Muslim Mediators in Arabia, 1890s-1930s: Some Thoughts on a Research Agenda'、Muslim Identities and Imperial Spaces: Networks, Mobility, and the Geopolitics of Empire and Nation (1600-2011)、4. July 2011、The Center for Russian, East European, and Eurasian Studies, Stanford University、

- (アメリカ)
- ⑨ 山口昭彦、サファヴィー朝 (1501-1722) とクルド系諸部族：宮廷と土着エリートとの相関関係」、2011年歴史学研究会大会合同部会(招待講演)、2011年5月22日、早稲田大学
- ⑩ So Yamane、The Rise of New Madrassas and the Transformation of Tribal Leadership in FATA, Pakistan', International Conference "The Otherness and Beyond: Dynamism between Group Formation and Identity in Modern Muslim Societies", December 5, 2009, Tokyo University of Foreign Studies
- ⑪ 吉村貴之、アルメニアとトルコの『歴史的和解』(はなるか)、国立民族学博物館共同研究「ポスト社会主義以降の社会変容：比較民族史的研究」、2009年11月28日、国立民族学博物館
- ⑫ 山根聡、パキスタンのアフガニスタン人：「客人」と「よそ者」の狭間で」、アフガニスタン研究ネットワーク、2009年11月27日、東京外国語大学
- ⑬ Takashi Oishi、Workmen, Machines, Schemes Shifted from Japan to India: Mobility of Labour Intensive Production in the Cases of Matches and Glass wares, 1900-1940, XVth World Economic History Congress (International Economic History Association), August 6, 2009, The Utrecht University (オランダ)
- ⑭ Norihiro Naganawa、Muslim Travelers and Empire: Local Politics and World Order in Late Imperial Russia, Junior Scholars Training Workshop "Mobility in Russia and Eurasia, June 17, 2009, University of Illinois at Urbana-Champaign (米国)
- ⑮ 古谷大輔、近世バルト海世界における大国像への迫り方：ロシア旅行記における大国ロシアの不在、新学術領域「ユーラシア地域大国の比較研究」第4・5・6班合同研究会、2009年3月4日、北海道大学
- ⑯ 古谷大輔、スウェーデン・アイデンティティの歴史的座標：民族紛争の背景に関する地政学的研究」、第二回国際シンポジウム「コトバの活断層：民族認識の座標軸」、2009年2月23日、千里中央ライフサイエンスセンター
- ⑰ Norihiro Naganawa、Muslim Travelers from Russia to the Ottoman Empire: Some thoughts on a Research Agenda, International Seminar "Eurasian Perspectives: In search of alternatives",

February 4, 2009, Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies. (インド)

- ⑱ 吉村貴之、故郷の表出：第一次大戦後のソヴィエト・アルメニアと国外のアルメニア人エリート、国際ワークショップ「イランと南コーカサスにおける民族性と国家」、2009年1月24日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ⑲ Takashi Oishi、Japanese Business Sojourners in Calcutta: Living the Business, City, Empire and Networks, International Symposium "Migration, Diaspora and the City: Mobility and Dwelling in Calcutta", December 12, 2008, Centre for Studies in Social Sciences, Kolkata, (インド)

[図書] (計10件)

- ① 山根聡、京都大学イスラーム地域研究センター、南アジアとイスラーム—知的ネットワークと民衆運動(2013), 19-36.
- ② 小松久恵、晃洋書房、奥山直司、田中雅一編、コンタクトゾーンの人文学4、(2013 予定)、83-100
- ③ 山根聡、平凡社、辛島昇ほか編、南アジアを知る事典(2012)、pp.27-28.482-483.
- ④ 山根聡、朝倉書店、帯谷知可、北川誠一、相馬秀廣編 中央アジア (朝倉世界地理講座：大地と人間の物語5)、(2012)、274-285
- ⑤ 王柯、香港中文大学出版社、東突厥独立運動：1930年代-1940年代、(2012)、353
- ⑥ 岡奈津子、朝倉書店、帯谷知可、北川誠一、相馬秀廣編、中央アジア (朝倉世界地理講座：大地と人間の物語5)、(2012)、324-334
- ⑦ So YAMANE, Routledge, Sakurai Keiko (ed.) The Moral Economy of the Madrasa-Islam and Education Today(2011),19-60.
- ⑧ Norihiro Naganawa、ロシア科学アカデミー出版社、D.M.Usmanova、濱本真実、Vostochnaia Literatura、(2011)、4
- ⑨ 吉村貴之、明石書店、宮地美江子編、中東・北アフリカのディアスポラ (叢書グローバル・ディアスポラ 3、(2010)、75-100
- ⑩ 吉村貴之、明石書店、赤尾光春・早尾貴紀編、ディアスポラから世界を読む、(2009)、80-113

[その他]

ホームページ等

[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group\\_05/index.html](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_05/index.html)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山根 聡 (YAMANE SO)  
大阪大学・言語文化研究科・教授  
研究者番号：80283836

### (2) 研究分担者

長縄 宣博 (NAGANAWA NORIHIRO)  
北海道大学・スラブ研究センター・准教授  
研究者番号：30451389

王 柯 (WANG KE)  
神戸大学・国際文化学研究科・教授  
研究者番号：80283852

岡 奈津子 (OKA NATSUKO)  
独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター・研究員  
研究者番号：80450493  
(H21 は参画なし、H23 は連携研究者として参画)

古谷 大輔 (FURUYA DAISUKE)  
大阪大学・言語文化研究科・准教授  
研究者番号：30335400

山口 昭彦 (YAMAGUCHI AKIHIKO)  
聖心女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：50302831

### (3) 連携研究者

大石 高志 (OISHI TAKASHI)  
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：70347516

シンジルト (SHINJILT)  
熊本大学・文学部・准教授  
研究者番号：00361858

吉村 貴之 (YOSHIMURA TAKAYUKI)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・ジュニアフェロー  
研究者番号：40401434

### (4) 研究協力者

小松 久恵 (KOMATSU HISAE)  
北海道大学・スラブ研究センター・研究員  
研究者番号：80552306